

## 武蔵野幕屋 日曜聖書講筵

## 油そそがれたる者

## ――ヨハネ第一書第2章――

1957年9月15日

小池辰雄

宥の供物 本ものをつかまえる その中に居る 靈魂が開け放たれる 無者は即ち無限者 我はエホバなり ダイヤモンド・クリスチャン 西方浄土 天下無敵 罪を赦されたるに因る 神の御意を行う者は永遠にとどまる 非キリスト 聖霊は祈りの世界でくる 御霊のキリストを受けとる 祈り

## 【ヨハネ第一2章】

1 わが若子よ、これらの事を書き贈るは、汝らが罪を犯さざらん為なり。人もし罪を犯さば、我等のために父の前に助主あり、即ち義なるイエス・キリストなり。2 彼は我らの罪のために宥の供物たり、ただ我らの為のみならず、また全世界の為なり。3 我らその誠命を守らば、之によりて彼を知ること自ら悟る。4 『われ彼を知る』みことばと云いて其の誠命を守らぬ者は偽者にして真理その裏になし。5 その御言を守る者は誠に神の愛、その裏に全うせらる。之によりて我ら彼に在ることを悟る。6 彼に居ると言う者は、彼の歩み給いしごとく自ら歩むべきなり。

7 愛する者よ、わが汝らに書き贈るは、新しき誠命にあらず、汝らが初より有てる旧き誠命なり。この旧き誠命は汝らが聞きし所の言なり。8 然れど我が汝らに書き贈るところは、また新しき誠命にして、主にも汝らにも真なり、その故は真の光すでに照りて、暗黒はややに過ぎ去ればなり。9 光に在りと言いて其の兄弟を憎むものは、今もなお暗黒にあるなり。10 その兄弟を愛する者は、光に居りて顛躓その裏になし。11 その兄弟を憎む者は暗黒にあり、暗きうちを歩みて己が往くところを知らず、これ暗黒はその眼を蒙ましたればなり。

12 若子よ、我この書を汝らに贈るは、なんじら主の御名によりて罪を赦されたるに因る。13 父たちよ、我この書を汝らに贈るは、汝ら太初より在する者を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈るは、なんじら悪しき者に勝ちたるに因る。子供よ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら御父を知りたるに因る。14 父たちよ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら太初より在す



者を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら強くかつ神の言その衷に留り、また悪しき者に勝ちたるに因る。<sup>15</sup> なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし。<sup>16</sup> おおよそ世にあるもの、即ち肉の慾、眼の慾、所有の誇などは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。<sup>17</sup> 世と世の慾とは過ぎ往く、されど神の御意をおこなう者は永遠に存るなり。

<sup>18</sup> 子供よ、今は末の時なり、汝らが非キリスト来らんと聞きしごとく、今や非キリスト多く起これり、之によりて我等その末の時なるを知る。<sup>19</sup> 彼ら是我等より出でゆきたれど、固より我等のものに非ざりき。我らの属ならば、我らと共に留りしならん。されどその出でゆきしは、皆われらの属ならぬことと願れん為なり。<sup>20</sup> 汝らは聖なる者より油を注がれたれば、凡ての事を知る。<sup>21</sup> 我この書を汝らに贈るは、汝ら真理を知らぬ故にあらず、真理を知り、かつ凡ての虚偽の真理より出でぬことを知るに因る。<sup>22</sup> 偽者は誰なるか、イエスのキリストなるを否む者にあらずや。御父と御子とを否む者は非キリストなり。<sup>23</sup> 凡そ御子を否む者は御父をも有たず、御子を言いあらわす者は御父をも有つなり。<sup>24</sup> 初より聞きし所を汝らの衷に居らしめよ。初より聞きしところ汝らの衷に居らば、汝らも御子と御父とに居らん。<sup>25</sup> 我らに約し給いし約束は是なり、即ち永遠の生命なり。<sup>26</sup> 汝らを惑す者どもに就きて我これらの事を書き贈る。<sup>27</sup> なんじらの衷には、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教うる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教え、かつ真にして虚偽なし、汝等はその教えしごとく主に居るなり。<sup>28</sup> されば若子よ、主に居れ。これ主の現れ給うときに臆することなく、其の来り給うときに恥ずることなからん為なり。<sup>29</sup> なんじら主を正しと知らば、凡て正義をおこなう者の主より生まれたることを知らん。

### ● 宥の供物

ちよつと喉を痛めているので、声が少し出し難いんですけれども、お許し願います。今日はヨハネ第一書の第2章です。今日は新しい人はいますか。あ、そう。

<sup>1</sup> わが若子よ、これらの事を書き贈るは、汝らが罪を犯さざらん為なり。人もし罪を犯さば、我等のために父の前に助主あり、即ち義なるイエス・キリストなり。<sup>2</sup> 彼は我らの罪のために宥の供物たり、啻に我らの為のみならず、また全世界の為なり。

「若子よ」と、勿論ヨハネは既に歳を老っておりまして、自分の親しい弟子ともいうところの集会の人たち、諸教会の人たちに向かって言っているわけです。「これらの事」という



のは、第1章で言いましたところの事、またあの方の事にも、余韻をもつて含めていと見ていいわけです。

### 「汝らが罪を犯さざらん為である」

と。「罪を犯す」とこの場合言っているのは、ここの「罪科」<sup>つみとが</sup>を犯すといった具体的なことを言っているようです。また、実際の具体的な生活でそういう罪を犯さない為であつて、「人もし罪を犯さば」、もし何か間違つたことをしたならば、

「私たちのために父の前に助主<sup>たすけぬし</sup>がある」

という言い方は、

「我らは父の前に助主を持つ」

というギリシヤ語の言い方だそうです。「エコメン」「持つ」という言い方です。もしも誰かが罪を——この「人」というのは「誰かが」<sup>たすけぬし</sup> anyoneです——罪を犯したときには、「パラクレートン」「パラクレートス」を、即ち「助主」<sup>も</sup>を有っている。「私たちは」といつて、「その（罪を犯した）人が」と言わないで、「我ら」と言わざるを得ないところに、ヨハネが勿論、人ごとでなく、自分のこととして、これを言っているわけです。助主は、いうまでもなく聖霊のことです。また、ここでは、

### 「即ち義なるイエス・キリストなり」

といつて——ヨハネ伝で助主を聖霊と言つておりましたが——その聖霊は勿論、教会の具体的な聖霊の存在としてのキリスト、霊なるキリストです。それで、「義なるキリストなり」と、具体的にキリストのことを直接に指したわけです。大祭司キリストです。大祭司でありながら、

### 2 彼は我らの罪のために宥<sup>なだめ</sup>の供物<sup>そなえもの</sup>たり、

と書いてありますから、義なるキリストは、その執成しの助主であると同時に、それはまた「供物である」。この「宥<sup>なだめ</sup>の供物<sup>そなえもの</sup>」という字は、ヘブル書で詳しく学んできた「フィラスモス」という字です。罪を贖うところの者。もつともこの「宥<sup>なだめ</sup>の供物<sup>そなえもの</sup>」という日本語は二字のようですが、ギリシヤ語では「フィラスモス」という一字です。我らの罪のために贖罪をする者、贖罪者といひましても、あるいは罪を除去する者、むしろ、その事態そのものを指しているような言葉です。「フィラステリオン」という字があつて、これはもう少し具体的で、事態よりも、者それ自身にかかっているようなことです。ローマ書の3章15節に出ていますが。

### 「<sup>ただ</sup>我らの為ばかりでなく、また全世界<sup>ただ</sup>の為である」

万人の為である。このキリストという贖罪をなすところのもの、その恩恵から外れる者が誰も、一人もいないという意味で、正に万人救済の角度です。

「全世界のためなり」

と特別にそうことわっている。これは単に選ばれたとか、選ばれていないとか、そういつ



た予定説式なところはむしろ、つき抜けた言葉です。原典でも正に「オルウ・トウ・コス  
ムウ」「全世界」という字です。all the worldという字にあたります。

3 我らその誠命を守らば、之によりて彼を知ることが自ら悟る。4 『われ彼を  
知る』と書いて其の誠命を守らぬ者は偽者にして真理その裏になし。

「その誠命」といつているところのことは、わかりませんが、これは「義なるキリスト」  
にかかってきますから、その「キリストの誠命」です。

### ●本ものをつかまえる

「その誠命を守らば、之によりて彼を知ることが自ら悟る」

ゲーテの詩集『クセーニエン』(Xenien)の中に、

「お前はどのようにして自分を知ることができるか。それは観察すること (betrachtung)  
によってではなく、行為すること (behandlung) によって、人間は自分を知ること  
ができるのだ」

と、さすがにゲーテという人は非常にヨハネと考え方が似ているところがある。ヨハネも  
ここで、「誠命を守るならば」という。誠命に従うこと、誠命を自分でこれにのつとつて、  
誠命に即して行動することです。即して行うときには、即ち「彼を知る」という。キリス  
トを知るのは、聖書の知識を、聖書を知的に知って、聖書を一生懸命研究してキリストを  
知っても、その知り方はどこまでも外的な知り方です。

「キリストを知る」

ということは、「彼を知る」ということは、彼の法、キリストの天則、を行うことによつて知る。  
「行う」ということを正に「知る」ということは、いわゆる「知行一致」といつて、まず知っ  
て、それを行に一致させるという角度からして一致できるものではない。それは知行一致  
という言葉の間違えている。信仰と行為の一致、「信行一如」ということも、知行一致とい  
うことも、ここに両方とも「行」が出てくる。即ち、行において知をつかまえる。行にお  
いて知をつかまえていくわけです。即ち、もう一つ言い換えると、

「行ずることは即ち知ることであつて、行ずることが即ち信ずることである」

ということ。いわゆるカトリックでもなければ、いわゆるプロテスタントでもない。それが、  
私たちが言いたいところの、本当の意味での聖書の事態なので、これが原始福音というもの。  
それを行ずることによつて知る。

皆さんは今日どのように準備されるかと私は思つて、ほつたらかしておいた。そうしたら、  
よく今日はそれぞれ準備をされた。即ち、備えることによつて、行ずることによつて、集  
会が何ものであるかを知る。それをノホホンで、ただやって来たつて、これはダメです。

それで、行ずることによつて知る。即ち、誠命を守ることによつて、初めてキリストを知る。  
福音は福音することによつて知る。頭で知つたつて、これはどうにもならん。



## 4 『われ彼を知る』と書いて

「知る」という字はこの場合、現在完了型で使っていますが、「これを知っているんだ」といったようなことで、済ましてしまつて、

## 其の誠命を守らぬ者は偽者にして真理その裏になし。

真理と虚偽というものははっきりと、光と暗、真理と虚偽をはっきりとこのヨハネは分けて語っております。

「知っているんだけど、まあ外側は偽る」

なんていうのではないんです、この「偽る」というのは。

## 「サタンは偽り者である。はじめから偽り者で人殺しである」

とヨハネ伝にも書いてある。書いてある。

## 4 『われ彼を知る』と書いて其の誠命を守らぬ者は

守ることが知ることなんだから、守るという事態が実存されないとそこには、それは偽りである。どんなにその「知」が、「知」の面において正しくあつても、大分、キリストについても答案は百点満点を書けましても、それは偽りであるという。この世の学校とは違うんです、この福音という学校の世界はね。それは紙の上に答案を書く世界じゃない。生活をもつて答案を書く世界です。人にどう弁解しても、自分にどう言い聞かせても、ご勝手です。しかし、神様の前にはダメです。とにかく、

「神の前に本ものであるかどうか」

ということとは、事実その人において本ものであるときには、必ず力が来る。生命が来ています。本当の喜びがあります。本当の平安があります。けれども、そうでないところには、どんなに繕つても、どんなに優しい笑みを浮かべても、弁解しましても、これはそこには本当のものが無い。人を誤魔化し、自己を誤魔化せても、神様の前に誤魔化すわけにはいかない。結局、それは自己がどうにもならない。そういう在り方をしていたら、いつまでたつても。

「弱つたなあ、そんな実存はなかなかできそうもないな」

なんて、なかなかできませんよ。できなくてもいい。もうその角度に行けば、一日24時間のうち、たった3分間その角度で生きて、その人は他の23時間何分という偽りに対して、その本ものをもつて、今度は勝つていくことができます。

その本ものがだんだん、プラスがマイナスを消していくような生き方にされて行くんです。その本ものは、自分からは出ない。その本ものはどうして出るかという問題を今日は皆さんと取っ組んで、その本ものの世界に入らなければしょうがない。その本ものの世界を私たちは集会しながら、常に本ものをつかまえることを、集会毎にやっていかないと、百ペン集会してもダメです。けれども、この本ものを集会毎につかんでいくなれば、その人は必ず前進していきます。私ははっきり言っておきます。必ず前進します。本ものを



つかまなかったら、幾度やっても、幾回どれくらい聖書をただ読みましてもダメです。どうか、私たちの集会はそういう集会であるということを、誰も例外なしにこれを自覚していただかなければ困る。

### ●その中に居る

5 その御言みことばを守る者は誠に神の愛、その衷に全うせらる。之によりて我ら彼に在ることを悟る。

このヨハネは何か結論の方からものを言っている。なかなかその原因にさかのぼらない。「その御言みことばを守る者は」といって、「どうして「どのようにして」守るか」なんて言わない。弱つたな、こういう断定的なことを言われては。「その誠命を守る者」は、言い換えれば、

「その誠命を守るならば、神の愛その衷に全うせらる」

「守るなら」といったって、一種の仮定ですよ。果たして守れるか、どうかわからないですよ、誠命を守るというのは。ヨハネが言っているのは、そのように律法的な意味で誠命を守るなんて言っているのではない。

「神の愛が全うされるような守り方はどんな守り方かと、こういうわけです。」

「汝、殺すなかれ」

「はい。私は殺人したことはありません」

と言うならば、それで果たして誠命は守られているか。いや、そうはいかない。私も殺人者です。

「汝、姦淫するなかれ」

姦淫したことはありません。果たして、本当にそれがヨハネが言う意味において守られているか。みんな落第です。

「汝、偽るなかれ」

これも落第。モーセの十誡はみんな落第です。ところが、ヨハネは、

「誠命を守る者は神の愛そのうちに全うせらる。これによりて我ら彼に在ることを悟る」

「誠命を守る者は神の愛がそのうちに全うせられる」

と言ひ、そしてもうひとつ、「我ら彼に在ることを悟る」と言つて、だんだん、内側の世界を語っている。神の愛はその中に全うせらる。中にですよ、外にはない。中に全うせらる。そうすると、彼は、その人は、我は、私たちはキリストの中に在ることを、彼の中に在ることを悟る。「エン・アウト・エスメン」「彼の中に在る」と、実に易しいギリシヤ語でそのまま書いてある。

6 彼に居ると言う者は、



今度は、「居る」という字が書いてある。「居る」「メネイン」という、「留まる」とか「宿る」という字です。

彼の中に宿っていると言っている者は、彼の歩み給いしごとく自ら歩むべきなり。

そういうならば、必ず自らそのように歩むべきであると。「オプセイレイ」、obliged、そういう義務があるという意味です。

「彼の歩み給いしごとく自ら歩むべきなり」

「彼に在る」という「の中に在る」は、もうひとつ言うと、「留まる、宿る」という言葉――恋人同志はその人の心の中に在るような在り方になっている。私はよく知りませんが、多分そうらしい(笑)――「の中に在る」という。それはその人間同志では、いつ雲行きでもって変わってしまうかわからないですよ。ところが、外側の雲行きがどうなろうとも、嵐が吹いてきても――もつとも、ギリシヤのお話のように素晴らしいのがあります。嵐が吹いてきても、その海峡を渡って向こう側に光っている燈台を目当てに、泳いで行つたという話がある。どんな嵐がきても、燈台目当てに泳いでいくような、そんな恋人のように――どんなに嵐がきても、絶対に光を見失わない。それは、光が消えてもおその存在を信じて泳いでいくような人は、本当に相手の中に居るという。私たちが本当に相手の中に居て、悔いなき者はキリストだけです。キリストだけは、どんな時にもキリストのもとに走って行つて、迎えられないことはない。

「いや、今日はお前はいかん」

なんて言つて迎えないことはない。どんなに失敗しても、どんなに苦しくても、どんなにキリストの前に出られそうもなくても、それでも、一切を投げ出してキリストのところへ泳いで行くなれば、キリストは、

「よくやつて来た」

と必ず喜んでくれる。これはルカ伝15章の父親と同じです。

そういったように、キリストだけが、私たちがその中に宿つて悔いのない人です。「彼に居る」というのは、そのようにどんな嵐にも、相手の燈火が消えてもおその中に、そこへ行つて宿るような、そういうようなのが、「その中に居る」ということです。

### ●靈魂が開け放たれる

6 彼に居ると言う者は、彼の歩み給いしごとく自ら歩むべきなり。

キリストはどのようにして歩んだですか。これはキリストは神の中に在る。

「我は父と一つである。我は父のうちに、父わが中にあり」

と。即ち、キリストは神の中に、うちに宿っていましたから、キリストの歩み方はあのような歩き方である。私たちもキリストの中にそのように、どこへ出かけて行つても、夜に



なったらキリストのところに宿る。靈魂<sup>たましい</sup>はいつもキリストのところに憩う。靈魂の憩いはキリストである。

「私の靈魂の憩い場はキリストである」

というように在る人。どこに行きましても、ふと我にかえると、我にかえったと思ったら、キリストに帰っていたと。よく「我にかえる」という言葉がありますが、

「お前は自分から抜け出ているからふらふらするんだ。もつと自分に返りなさい」

という。だけでも、自分にかえってみたって、実はしようがないので、本当の意味において「自分にかえる」ということは、「キリストにかえる」ということです。どんな苦しいときにも、どんな如何なる場所においても、靈魂<sup>たましい</sup>の立ち帰るところは、宿るところは、そこが即ちキリストの宿りである。これが「キリストに居る」というんです。いや実に、キリストに居りながら歩いている。キリストの中に在りながら歩いている。これをやっていなければダメですよ。

皆さん、どこへ行つたつて、空気があるでしょ。空気の中に在るではないですか。どこへ行つたつて太陽の光の中に在るではないですか。況んや、私たちを創造<sup>つく</sup>った神、キリストの中に、何処に行つて離れることができるか。「どうして「どのようにして」在ろうか」なんて心配する必要はないんですよ。本当に人間の人間<sup>ゆえん</sup>たる所以<sup>ゆえん</sup>を考えるとというならば、

「人とは即ち神の中に在る者であつた」

というだけの話ですよ。

「キリストの中に在る者であつた。ああ、気がついてみたら、なんにもうろたえることはなかった」

という。

『我、滑<sup>すべ</sup>りぬ』というときに、見よ、我、汝の腕の中に在った」

と詩篇のどこかに書いてある。足が滑つたと思つたら、それはキリストの腕の中に滑り込みをしてしまったと。これが本当のクリスチャンです。その境地を掴<sup>つか</sup>まえたなら、もういいですよ。ところが、なかなかそういうような一番難<sup>やさ</sup>しいことが一番難しくしているからおかしいですね、人間というものは。ドカンと尻もちついたら、キリストの中に在ったということに気づくような、そういった在り方になっているか。どこへ行つても、知らないでいたら、あつ、私は空気の中に在った。いや実に空気は私の肺の中に在った。いや実に、その空気は常に私の血を、時々刻々に清らかにしてくれている。そのように、

「イエス・キリストは、私の知ると知らないとにかかわらず、いつも恵みの事態として捉まえていて下さった。私の生きているのは、キリストの恩寵によるのである  
った」

ということに気がつくかどうか。

なんでもありません。ちつとも難しいことはない。こんな易しいことはない。クリスチャ



ンとは、なんにも難しいことはないですよ、こんな易しいことはない。逃れようのないところに居るということを、ハタと気がつくだけの話です。どこへ行つたつて逃れようがない。神様の前、キリストの前を逃れようがないところに居るということを本当に恩恵として感ずるか。靈魂たましいがそれだけ開け放たれているか。靈魂が開け放たれれば、開け放たれるほど素晴らしいくなって行く。皆さん、いいですか。閉じ込めれば閉じ込めるほどダメですよ。自分というのを身構えれば身構えるほどダメです。靈魂は楽に開け放つていてください。空気も窓を開ければ開けるほど、すがすがしくこの部屋の中に通つてくると同じことです。みんな、凝りこりを持つているね、人間というものは。余計な凝りを持つている。凝りなんか、ないはずです。その凝りというのは、要するに罪なんです。自己を身構えているからです。何を身構えているか。ところが、それが何も身構えないということ。始めは大いに修養して技をみがいて、なかなか身構えのいい剣道の達人がいます。けれども、そいつをもうひとつ突き抜けてしまうと、身構えも何もありません。隙すきだらけである。すぎだらけだけれども、これが本当の身構えということになる。

### ●無者は即ち無限者

本当にキリストに在つて解放されて、キリストに在つて開けっ放しの人は、かえつて何人なにびともその人を犯すことができない。皆さんはそういう存在になる。この前もちよつと引用した老子あたりの思想が大分それに近い。支那の老子という人は、非常に無の世界が大きい。そういうのが実は、この「在る」という世界です。「の中に留まつている」という世界。だから、自分は下手な身構えをすると、罪を犯す。自分の力でやろう、自分の智慧でやろうとして身構えると、どつこいサタンの方が強いもんだから、やられてしまう。その時にどうするか。

### 「助け主あり」

と、そこに書いてあるでしょ。助主たすけぬしです。

「ああ、お前は下手な身構えをしたね、大丈夫だよ、私が隠れ蓑みのみたいになつて、ちゃんとこつちが身構えているよ。キリストが身構えているから、お前はそんな下手な身構えは止よした方がいい」

と、こういうわけです。それが助主です。これが義なるキリスト。義というのは正義ではありませんよ。17節にあります。

17世と世の慾とは過ぎ行く、されど神の御意みこころをおこなう者は永遠に存たもたなり。

神の聖意を行う者——その「存たもた」という字がやつぱりさっきの「メネイン」という字です——「神の御意みこころをおこなう者」、これは義者です。義という、義なるキリストは「神の御意を行う者」、即ちキリストです。

「汝はキリストを持つている」



と。キリストは即ち助主。助主は「代言者」という字、その人に代わって語る者。その人に代わって代行者になるです、代言は。その人に代わって行ずる者。私は自分で行じようとしたってダメなんです。さつきから、

「行わなければ、知りません」

と言いましたね。しかし、その行為はどこから来るか。自分の行いに絶する、絶行するときに、自分の行いに絶する時に、我に代わって行うところの者が私の中に在って行っていく。私の中にきて言ってくださる。これが、キリストが神にあって在った在り方であり、我々がキリストに在って在る在り方なんです。即ちこれが間違いない行、間違いない言ですから、このキリストの行、キリストの言は。ナザレのイエスは、地上に在っては神の中に本当に在って、神がキリストに在って行じ給い、神がキリストに在って言い給うた。それがキリストの地上の実存の角度です。

彼は無者です。何ものでもない。「無者である」というと、何か非常に変のように聞こえるけれども、そうではない。この無者の中にもものすごい積極性がある。この無者の中に上から臨んでくるところの無限者があるんですから、無者は即ち無限者であるんですから。代行者、代行者が、

「お前たちのために、私の前に代言、代行者がある。これ神の聖意を行う、即ち、義なるキリストである」

と。だから、そうだったら、なるほど私はキリストの中に在ると思っていれば、

「どこへ行つても私はキリストの中に在った。キリストが私を捕まえていたんだ」

と。それで、<sup>たましい</sup>靈魂を開け放して、もうそこで祈り心地になれば、そこに言わしめられること、そこに行ずることは即ち天来のものです。これは今ここでもって、ヨハネの言わんとする

「彼の誠命を守る」

という、彼の語り教え給いしことを守るためには、その人の中に居なければ守ることができないということが、初めてそこでわかってきます。一番初めに結論が出ているんです。

「彼に在る、彼に居ることを悟る」

という。居たなら、留まっていたなら、本当にその中に在った。中に在ったなら、本当にそれは守られてくるんだと。

道德と宗教が反対では困る。どこまでも、信仰の世界は、信仰の現実が私たちの現実中の現実となっていくことに気がつくまではダメです。私は「宗教」なんていう言葉は嫌いです。人間が一番人間らしくある在り方はどこにあるか。空気を吸うような在り方です。答案はそれでいい。空気を吸うような在り方です。太陽の光によって光を見ているような在り方です。

私たちは目で見ているけれど、目に光があるか。目それ自身に光はない。その証拠には私たちは暗の中に入ったら、私たちは目から光が発してものが見えるかといったって、そ



うはいかん。猫みたいなやつは多少できそうな顔をしていますけれども、猫だつてダメですよ。ただ感光度がちよつといいだけの話で、それ自体で光を発するわけにいかない。やつぱりこの太陽から光が来ているから、その光を受けて光を見ている。目に光が宿っているわけです。目に光が宿っているから、また見えるわけです。だから、私たちは天界の光によって光を見る。詩篇のどこかにあったな。

「そはいのちの泉はなんじに在り われらはなんじの光によりて光をみん」(詩篇36・9)

「光によつて光を見る」という。

「言によつて言する<sup>げん</sup>。行によつて行ずる。光によつて光りする」とまあいうわけです。

「誠命を守る」なんていうと、誰でもみんな嫌ですね、

「誠命を守るのは、どうも困つたなあ、窮屈だなあ」

なんて。キリストの誠命は窮屈ではない。キリストの誠命は、これに則<sup>のつと</sup>るときに本当に自由、本当に力がある。それは今言つた、この構造だから。これは、

「誠命をお前たちは守れ」

と書いてあるけれども、キリストが中に入つて留まつてきたらば、誠命は守らざるを得ない。これは則<sup>のつと</sup>らざるを得ない。これは、「自由かつ必然」と申し上げる所以<sup>ゆえん</sup>です。

## ●我はエホバなり

7 愛する者よ、わが汝らに書き贈るは、新しき誠命<sup>いましめ</sup>にあらず、汝らが初<sup>はじめ</sup>より有<sup>も</sup>てる旧<sup>ふる</sup>き誠命なり。

なかなかヨハネは面白いことを言う。キリストが来て、正直、「新しい」です。けれども、ここでは「旧いんだよ」という。さすがに、ヨハネ、ペテロは旧約から貫いて見えています。註解者の大方は、この「初めより」をキリストの地上に現れた「初めより」にとつている人が多いけれども、そうではない。これは旧約の、もし引つ張るならば、申命記7章、レビ記19章あたりに出ている言葉です。どういう誠命かというと、申命記7章6節から、

「其は汝は汝の神エホバの聖民<sup>あやふし</sup>なればなり汝の神エホバは地の面の諸<sup>おもて</sup>の民

の中より汝<sup>えら</sup>を擇<sup>えら</sup>びて己の宝の民となしたまえり 7 エホバの汝らを愛し汝らを擇<sup>えら</sup>びたまひしは汝らが万<sup>よろ</sup>の民よりも数多かりしに因るにあらず汝らは万の民の中に最<sup>いと</sup>も小さき者なればなり 8 但しエホバ汝らを愛するに因りまた汝らの先祖等に誓<sup>ちか</sup>ひし誓を保たんとするに因りてエホバ強き手をもて汝らを導きいだし汝らを其奴隸たりし家よりエジプトの王パロの手より贖<sup>あがな</sup>いだしたまえるなり 9 汝知るべし汝の神エホバは神にましまし真実の神にましまして之を愛しその誠命<sup>いましめ</sup>を守る者には契約を保ち恩恵<sup>めぐみ</sup>をほどこして千代にいたり」(申



## 命記7・6(9)

「真実の神」は、真理の、エメス、アーメンの神という。神はイスラエルの民を愛し、贖い、救い出した。そして、それが神のイスラエルに対するところの、まこと、真実というものの、真理というものであった。「真実の神」とは「エール・エメス」という。

## 「真実の神にましまして之を愛しその誠命を守る者には」

神様の誠命。それをヨハネは「誠命」と言い、パウロは「律法」と言います。モーセの十誡、律法はもとモーセの十言、十の言。神が愛し給うたから、この神様の言を守るためには、神様を愛さなければ守れないんです。即ち「誠命を守る」ということと、「神を愛する」ということは、ここにおいて一つです。ただ、神が汝らを愛し給う。神を愛することなくして、どうして神の言に従うことができるか。もし愛することなくして従うなら偽りです。友人の友情関係も、本当に靈魂の触れ合いがあつて、

「私のあの友人の一言はどんなことになつても変わらない。また、一言を放つたならば、必ずそれは実行する」

というところが本当の友人関係の気合です。それと同じように、神様とイスラエルは、愛によつて靈魂はピシツと相い応える。だから、言うことには、

「ああ、喜んで、はい、そうします」

「おお、できるようにお前をさせてやる」

とね、神様は。私はこの間「言い逆らい徴」〔註：1956年東京療養所東講堂での講述録音による。『曠野の愛』誌26号、1956年秋冬季合併号に掲載〕の中にも書いてある通り、神様からの信愛がかかつてきているから、この信愛に応えることが即ち最も深い意味において、神の言を既に内面からつかまえているということです。

レビ記の19章18節。その誠命の具体的なことは何かというと、17節から。

「<sup>17</sup>汝心に汝の兄弟を悪むべからず必ず汝の隣人を勸戒むべし彼の故によりて罪を身にうつくる勿れ<sup>18</sup>汝仇をかえすべからず

「仇をかえすべからず」という。仇には逆に恩で報いるくらいのところです。

汝の民の子孫に対して怨を懐くべからず己のごとく汝の隣人を愛すべし我はエ

ホバなり」(レビ19・17(18))

これがいいんです、

「我はエホバなり」

と。これに何もかもが因る。

「己のごとく汝の隣人を愛すべし」

これはキリストもこの言をつかまえて言われた、「己の如く隣人を愛すべし」と。人間は、自己愛は本能的である。けれども、その自己愛ではない。

「その自己を愛する強さを逆に、人を愛せよ」



と。「己も愛していいが、人も愛せよ」なんて、そんなことを言っているのではない。キリストは、

「己を憎まなければ、わが弟子となることができない」

と言われた。自己に敵とならなければダメだという。自己に敵とならなければダメです、正直。この世の修養の道はみな自己拡充、自己完成です。ところが、キリストが、

「父の全きが如く全かれ」

と言われた。けれども、「お前を、自分を全くせよ」とは言わない。

「父の全きが如く全くなれ。お前は自分なんか完成なんてできないよ。父の全きを求めよ、自分なんか求めるのではない」

と。己を憎み、己を棄て、己を与えていくような在り方は、ここに言うところの、

「己の如く隣を愛すべし。我はエホバなり」

ということ。面白いですね、この「我はエホバなり」は、どうです、お終いの方でもって、「我はエホバなり」という。なんか論理が続かない。

「ええ、貴神はエホバに相違ありません」

ではない。

「我エホバはお前を、頑なな民のお前をこんなに愛しているじゃないか。この無限の極みまでの愛である私。私はお前の神ではないか。私とお前とはそのように一つではないか。そうしたらば、私の愛がお前を通して隣人を愛せざるを得ないだろう。愛すべし。愛させてやる。愛せざるを得ない。私がエホバであるから!」

ということですよ。

### ●ダイヤモンド・クリスチャン

7 愛する者よ、わが汝らに書き贈るは、新しき誠命にあらず、汝らが初より有る旧き誠命なり。この旧き誠命は汝らが聞きし所の言なり。

この「初より有る旧き誠命である」とヨハネが言ったのは、初めからあった、もうモーセの時から伝えられていたところの、旧い誠命は実は、愛の誠命であつた。愛の律法であつた。申命記は「愛の律法の書」と言われるくらいです。さすがに世界最大の神学者バルト先生は多少その角度から気がついていいるから、「律法と福音」と言わないで、「福音と律法」というような言い方をしている。けれども、バルトの『福音と律法』(Evangeliun und Gesetz 1935年)というのを読んでみても、まだちよつと私はもの足らないけれども。

初めっからこの律法の根本精神はエホバの愛の——エホバは「妬みの神」といわれる、愛のエホバは愛しているので——「愛の律法」であつて、旧き誠命は即ち愛の誠命であつた。だから、これは原始誠命と言つたつていい。原始誠命でありまして、それが即ち今度は、なんだつていうと、



この旧き誠命<sup>いましめ</sup>は汝らが聞きし所の言なり。然れど我が汝らに書き贈るところは、また新しき誠命にして、

「然れどまた」というのは、「また再び」というような意味と同じですが、

「再び私がお前たちに書くところのものは、これは新しい誠命である」

と。「新しい」というのは、「旧くして新しい」んです。「ネオス」でなくて、「カイネーン」という字が書いてある。「カイネー・ディアテーケー」「新約聖書」の「新」と同じです。質的に新しいという意味です。旧いんだけど、今度はこれはまた、新しい誠命である。これは質的に新しい誠命になった。本当は、その大事なものは旧約のモーセの中に隠れていた。しかしそれは、露<sup>あらわ</sup>には啓示されてない。だから、今度はキリストにおいてその誠命は質的に新しく現れてきた。なんとなれば、キリストというひとが天上天下、東西古今、初めて神の意志を全く行じた人ですから。その人によって展開していたところの誠命は質的に新しい誠命ですから、それで新しきという。この場合に「新しい」というのは、質的に新しい誠命である。「旧くして」かつ「また新しい」というのはそういう意味ですよ。ただ、「時間的に新しく」なんていうのではない。

それは質的に新しくされた。隠れていた本当の新しいのが——初めからあるけれど、神様の中には隠れているけれども、それがいろいろあらわになってきた——旧約においては、これを受け損ないをしてしまった。神の誠命を、この神の信愛に応えて、本当にその面から内面的に行じたのが——預言者といえどもそれが完全にできなかった——ただキリストだけがそれをつかまえた。だから、隠れていたものはここに新しく、現象面においては質的に新しいものとして現れてきたわけです。

また新しき誠命にして、主にも汝らにも真<sup>まこと</sup>なり、

この事態はキリストにとつて、また汝らにとつて真であり、本当であつて、

その故は真の光すでに照りて、

真の光、いうまでもなく、キリストがやって来て、

暗黒<sup>くらき</sup>はややに過ぎ去ればなり。

キリストの恩寵によつて旧きは既に過ぎ去った。旧きものは現実には、信仰の世界では、神様の恩恵<sup>めぐみ</sup>としては過ぎ去っている。けれども、これは恩恵を受けとる方の側からいうと、「ややに」なんです。私たちも死に至るまで、いよいよ、栄光より栄光へ、真理より真理へ、生命より生命へと展開していく。これは受けまた受けていくんです。受けまた受けることが前進。悔改また悔改が前進である。

普通のクリスチャンは、「悔改め」というと、何か消極的に思うかも知れないけれども、そうじゃない。自分を投げ棄てていくという、悔改めはものすごい積極的な歩き方なんです。ケチケチ、自分の小さな我なんでものをしまっておくのではない。そいつをさらけ出していくと、その人は光っていく。そして、何か知らんが、本当の力が、本当の生命が展開し



ていく。そういうのが、このややに新しく、ややに光になっていく。だから、私たちはこの集会毎に嬉しい。集会毎に、繰返しでなくて、前進であるから。本当に集会毎に、何だか知らんが、前進させられていることを体験していますか、皆さん！ それでなかったら、ダメですよ。

9 光に在りと言って其の兄弟を憎むものは、今もなお暗黒にあるなり。10 その兄弟を愛する者は、光に居りて顛躓<sup>つまずき</sup>その衷になし。

ベンゲルは「愛<sup>いっく</sup>むことと憎むことはその中間はない」と言ってますけれども……

……あのネールという政治家はそちらの方の角度に近いでしょうね。ラーダークリシュナン〔註…サルヴパッリー・ラーダークリシュナンはインドの政治家、哲学者。第2代大統領。近代インドを代表する思想家。業績としては、インド哲学と西洋哲学を比較して共通点を見出したこと、英語圏の社会にインド哲学を広めたことが挙げられる〕というあの副大統領。偉いのが二人いますよ、インドには。素晴らしいですよ、あのラーダークリシュナンという人は。この間、私はちょうど紀伊国屋で彼の書いた、『宗教における東と西』（1959年）という本を——まあ英語が原本だけど、独訳がありまして、買いたいと思っっているけれども——読みたいと思っっている。とにかくやっぱり、インドではケタ違いなのが出てきます。やはり、素晴らしい宗教の伝統を持った国であるだけに。

政治家であろうと、実業家であろうと、芸術家であろうと、学者であろうと、なんだろうと、また、台所で働こうと何であろうと、とにかく、質的に第一級の、皆さん、人物にならなければダメですよ、質的に。その大小や、やることは何でもいい。神様の前には質的に第一級の人物にならなければダメです。質的に第一級の人物になれば、

「ああ、そうです。ラーダークリシュナンさん、ネールさん、そうです」

といって非常に楽に読める。なにもこっちは偉がるのではない。言うことがよくわかる。なんとなれば、キリストの光がその人に来ていれば、ですよ。キリストの光が来ているならば、どんな東西古今の偉大な芸術家、学者、実業家、政治家、軍人が言ったり為したりしたことでもみんなわかる。本末的なことは分からなくていい。けれども、その気合がわかるんです。それはキリストの光で見えているから。ランプや電気で見えているのではない。また、太陽の光でもない。神様と同じ、このキリストの光から、その光でものを見えているから。そういう意味において、皆さん一人ひとりが第一級の人物にならなければ。

「いや、それは難しい」

なんて。いや、ちつとも難しくない。自分でやろうと思ったら難しい。キリストの光をさつき言ったように宿せば、靈魂の窓を開けてキリストの光を宿せば、皆さん、成らざらんと欲しても第一級の人になる。みんなダイヤモンドになる。ダイヤモンド・クリスチャンを私は作ろうとしている。その外のものを作ろうとしているんじゃないんだ、この幕屋では。

「私は、ダイヤモンドはまあちよつとご遠慮しましょう」



という人はどうぞ、遠慮なく止めて頂きたい。私はダイヤモンドを与えるために、福音のダイヤモンドを、ダイヤモンドの福音を与えようと思つて、私もそれを戴こうと思つて、やっているだけの話です。そういう第一級にならなければダメです。第一級になれますよ。そうしたならば、世界は非常に良くなる。

### ●西方浄土

9月1日は震災記念日で、私は特に震災記念日が1日で日曜日に当たっているから、皆さんと集会をこの9月1日から始めようと思つて、やったわけです。塚本先生の奥さんは9月1日に震災で鎌倉で仆れた。藤井先生の奥さんは10月1日に亡くなられた。私の尊敬する先生方のことですから、敬意を表したわけです。塚本先生から葉書が来まして、

「今日の夕焼は奇麗だったそうです。」

今日というのは9月12日のこと。先生はあつちの方に居て仕事をしているんですから、そして、13日に東京に帰つて来られたわけです。

というのは遅く昼寝をしたために、最後の夕焼を見ることができなかったのです。私は夕焼を見ると、クリスチャンのくせに仏教に育ったせいとか、西方浄土を憶います。

そして、自分の歳が暮れに近づいたので、浄土近しの感を持ちます。

先生は七十歳を越えられましたから、全くの白髪の老人です。

こんなことを言つと、また、先生方に叱られるでしょうか。……」

と書いてある。「先生方」というのは、私たちのことをちよつともじつて言つた言葉らしい。塚本先生がこういつた西方浄土というような感情を抱かれた。これは日本人にも仏教の伝統がずっとあるから、殊に古い人は。今の新しい人は分からないかも知れませんが。我々だって、そういった仏教的な雰囲気というものはわかりますよ。けれども、私もかつては塚本先生の一人の弟子でありましたから、何も叱るところではない。この先生のお気持はよくわかる。西方浄土であろうと、どういふような感じ方をしたって、一向差し支えない。

すべての善きものは、みんなこれは神様の光の中に入つてしまふ。仏教の世界の素晴らしいものも、みんな実は、神の世界に包括されてしまふ。それだけ福音は、一切の正しきもの、善きものは全部これを包括してしまふ世界だと私は思っています。天国には仏教徒も、ファイイ教（イスラム教）徒も、何でも居ます。決してそれが信じていたところの何ものかによつて区別なんかするような、神様はそんなケチな神様だとは思わない。但し、虚偽はダメです。虚偽者は天国には入つて行けない。とにかく、大きな世界ですから。

そうかといつて、それが決して私たちは福音をばかすというんじゃない、福音は、本当の原始福音にしっかりと入つて行けば、それは高くなればなるほど眺望が広がる。深くなればなるほど一切を荷つていくし、高くなればなるほど眺めは広い。いい加減の高さじゃ、水平線もちよつとしか見えませんよ。ところが、今度は、地球を遙かに絶したところから



地球を見れば、地球の全部を掴まえることができます。私たちは、お月さんを掴まえてい  
るじゃないですか。お月さんという現象を見て、お月さんを遙かに絶したところの距離か  
ら見ている。そのように一切を超絶したところの原始福音の高さに入ったら、全部が掌握  
できるというわけです。

「あれはいかん、これはいかん」

なんて、ケチくさがることはない。だから、キリストを本当に掴まえている世界は、マタ  
イ伝の山上の垂訓のところの気持ちがわかったら、もう一切がつかまえられる。しょっちゅう、  
私が言うところです。

### ●天下無敵

今日のところにも少し関係しています。マタイ伝5章の43節、

「43『なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし』と云えることあるを汝等き  
けり。44されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために  
祈れ。45これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。」

いや実に子であるからだ、というんです。

天の父は、その日を悪しき者のうえにも善き者のうえにも昇らせ、雨を正し  
き者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり。46なんじら己を愛する者を愛す  
とも何の報をか得べき、

このヨハネは、

「互いに兄弟相愛せよ」

と、あとの方で大いに言ってます。そういうところの兄弟というのは——信仰の交際の皆  
さんの間柄というのは、我々クリスチャンは兄弟姉妹——いい加減な気持ちで言ってはダメ  
ですよ。神様において、キリストに在って兄弟姉妹という。それが

「あの人たちは、この人たちは……」

ではダメですね。互いに妙なグループを作らないで——人間だから、それは人間的な角度  
で多少、グループもできるでしょうけれども——そんなものはいつもつき抜けてなくては  
ダメです。そのつき抜けがなかったら、それはクリスチャンじゃない。兄弟が本当に網の  
目のように互いに組み合っているか。それをしっかりとヨハネが言います。と同時に、そ  
いつが小さなワクを作るのではない。その網は全世界に向かって広がっていく。その意味  
においてキリストは、

「ただ兄弟を愛したってダメじゃないか」

という。

取税人も然するにあらずや。47兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、  
異邦人も然するにあらずや。48さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全



かれ。」(マタイ5・43〜48)  
と。その前にも書いてある、

「直き者にも直からざる者にも、正しき者にも正しからざる者にも、雨を降らせ、陽を照らしている」

ところの一視同仁的な、神の恵みの愛、突き抜けの愛、敵をも愛するような、一切例外をもたないような愛によって愛すること。

「天の父の全きが如く」

ルカ伝には、

「父の慈悲なるが如く慈悲なれ」

と書いてある。これは人間にはできませんよ。

できませんけれども、できるんです。福音は私たちにできないことを要求しているのではない——いや、実にできないことを要求しています。どれもこれも一切できません。どれもこれもできないんだけれども——これはどれもこれもできる。どれもこれも私たちが自分の身構えではできないけれども、自分を開放してキリストを迎えたならば、できる！また、できなければ生命にならない。生命がくれば、必ず展開していく。キリストの生命というものはそれ以下のものでない。

だから、天下無敵という。天下無敵です。天下に敵は無い。敵をも愛するんだから、もう敵を愛したときには、その人には敵はないんですよ。敵というのは大体、憎むものなんだからね。敵を愛しちゃったら、それはもう敵ではない。だから、天下無敵だという。こつちがなんか偉くて強くて敵がないなんて、そんなんじゃない。弱きに絶すれば敵がなくなる。キリストがその愛の強さをもって臨み給うから。言い逆らいを受けると、逆に言い逆らった一切の人を包括してしまうというのが、我々の勝利というものです。

この間、何か、キリスト教団の超教派の集会があると、私のところにも招きが来たが、私は時間の都合で行かないけれども、結構なことです。超教派の、アメリカのなんとかいう人がやって来るんだそうです。

今、マタイ伝でキリストの聖言を引用したような具合に、要するに、光即愛、即生命。いつかも言ったように、Licht (リヒト 光)、Leben (レーベン 生命)、Liebe (リーベ 愛)。これは drei (ドライ)-L、三つのLでありまして、光と生命と愛とは一つなんです。キリストは光であって、生命にして、

「我は永遠の生命」

という。そして、キリストは極みまでの愛である。こういう世界は環流している。生命が、光が、愛が環になつて流れている。観念的にただ限定して規定したつてどうにもならん。皆さん、靈魂たましいがそういう質になってきましたね。どうか、若い人は大いに素晴らしくなつてください。私なんかに遠慮しないでね。くすぶつたような顔をしてちゃダメです。



## ●罪を赦されたるに因る

11その兄弟を憎む者は暗黒にあり、暗きうちを歩みて己が往くところを知らず、これ暗黒はその眼を矇くらましたればなり。

12若子よ、我この書を汝らに贈るは、なんじら主の御名によりて罪を赦されたるに因るよ。

なかなかこれは面白いですね。

「主の御名によりて罪を赦されたるに因る」

と。「赦されたる」は現在完了で、赦されてあるのに因る。「たる」は日本語でいうと、「である」でしょ。「である」が「たる」になるじゃないですか。ですから、「赦されて、既に、あるに因る」んです。御名によりて。祈りのときにも、「御名によりて」というけれど、靈魂を込めて「御名によりて」と言わなければダメです。

13父たちよ、我この書を汝らに贈るは、汝ら太初はじめより在います者

「太初より在す者」とはキリスト。

を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈るは、なんじら悪あしき者に勝ちたるに因る。

「悪しき者」とはサタン。

子供よ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら御父みちちを知りたるに因る。

素晴らしいですな。

「御名によりて赦されたるに因る」

「御父を知りたるに因る」

という。先ず、「御名によりて赦された」という一番大事なところから始まって、そして、

「太初より在る者キリストを知りたるに因る」

と。そして、

「悪しき者サタンにキリストによって勝った」

と。また、「御父を知りたるに因る」という。「知る」といったって、頭じゃないですよ。これはみんな受けとっている始末ですよ。

14父たちよ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら太初はじめより在います者を知りたるに因る。若き者よ、我この書を汝らに贈りたるは、汝ら強つくかつ神の言その衷うちに留り、

神の聖言はただ憶えているわけではありません。神の聖言が即ち衷に留まって活かしている。

また悪しき者に勝ちたるに因る。

聖言が留まれば必ず勝つ。聖書の言が私たちに留まるときに、化体するとき、宿るときに本当に力となる。そこらの神学校や、普通の宗教学校で、いい加減なことをいくら教えたってダメですよ。ええ！ 本当に留まらなくては。私たちも聖言を確しかと体に受けとめる、



留まる読み方をしなかったならば。本当に受けとったならば、もう同時に力ですから、悪しき者に勝つ。即ち、

「悪しき者に勝ちたるに因る」

と。半分、受けとっているから、半分、自分なんてものを持っているものだから、すぐ自分の方に負けてしまう。

<sup>15</sup> なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する

愛その裏になし。

非常にはつきりした言い方です。

「世をも世にある物をも愛すな」

と。しかし、キリストは世を愛し給い、

「<sup>16</sup> それ神はその独子<sup>ひとりご</sup>を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠<sup>とこしえ</sup>の生命<sup>いのち</sup>を得んためなり。」(ヨハネ3・16)

ヨハネ伝3章16節です。世を愛した。ヨハネ伝、ヨハネ書でいうときの「世」は、みな「罪の世」ということです。勿論、私たちは、ある意味において、世を愛さなければダメです。

「敵をも愛せよ」

というんですから、世を愛さなくてはダメですよ。この「世を愛する」というこの「愛する」という字は、しかも「アガペー」という字が書いてある。

「世をも世にある物をもアガパオーするな」

と。本当は世を愛さなければいけない。世を愛して、そして世をサタンの世界から救い上げるのが、世を愛することですから。但し、

「世をそれ自身として愛するような愛し方がいかん」

というんです、ここだという世とは。

「なんじら世をも世にある物をも愛すな」

というのは、世も世にある物も、それ自身として、それ自体を直接的に肯定して愛するよな愛し方をしたら、世にとらわれてしまうから、世の奴隷となってしまうから、そんなことをしてはダメだと、こういうわけです。

「人もし世を愛せば」

そういった世を即的に愛するならば、直接的に愛するならば、

「御父を愛する愛その裏になし」

と。聖なる神は罪びとを愛する。世にあるところの罪びとを、聖者なる神は愛する。けれども、その罪びとを愛する神様は、どういう意味かというと、その罪びとが本当に立ち帰る、これを立ち帰らせる為、闇の世界から光の世界へ入れようとして愛しているので、神様といえども、罪びとをただそれ自身として愛しているのではない。それ自身を愛して、

「ああ、よしよし。何でも勝手なことをさせておけ」



と。そうじゃない。神様が私たちを愛し給うのは、

「私はお前たちを本当に光の子にしてやろう」

という、本願、悲願、靈願をもって世を愛している。私たちもその本願、悲願、靈願をもって世を愛するならば、それが本当の愛です。けれども、悲願、靈願もなくて、世を「ああ、よしよし」と愛していたらば、これは世の奴隷、罪の奴隷、闇の奴隷になって、おしまい。

●神の御意を行う者は永遠にとどまる

<sup>16</sup> おおよそ世にあるもの、即ち肉の慾、眼の慾、<sup>もちもの</sup> 所有の誇などは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。

その通りですね。父から出ているのではない。人間の内側からくるこの肉の慾、眼の慾、そこから来るところの、いろんな刺激によるところの慾、所有の誇りなどは、御父より出づるにあらず、世より出づるなりと。

私もこの聖書というものを愛するけれども、これは徴ですよ。これは恵みの徴。そして、そこに真理が盛られているその真理を愛するので、この本がいくら素晴らしくたって、これはあと何千年もたてば、みんなしみだらけになって、ダメになる。

<sup>17</sup> 世と世の慾とは過ぎ往く、されど神の御意をおこなう者は永遠に存るなり。

永遠に宿り、留まる。これはいい言です。

「神の御意をおこなう者は永遠に存るなり」

こういう聖言はしっかりと掴まえておかないといけない。「ホ・ポイオーン」「存<sup>とじま</sup>」るところのもの」は神の御意、聖意です。

「聖意を行ずるところの者は永遠に留まるところの者である」

ここに奇麗な花をそなえてくださいました。花はしぼんでいきます。けれども、この花において、この過ぎ往くところのものにおいて、しかし、過ぎ往かざるものを見る眼がある。移り往くところのものを見て、移り往かざるものを観る眼がある。

「ああ、この世のものはどうせ過ぎ往かあ」

なんて言って、一切のものを粗末にする在り方は決してよくない。ものもすべて、これ、神のものです。どんなに移り往くものも神の<sup>もの</sup>有です。

ユダヤ人が食物に潔き食物と潔からざる食物とを別けていた。ところが、キリストは、神の与え給うものはみな祝福された。ペテロは、潔きもの潔からざる食物のことで躓いていたら、靈幻に出つくわして、使徒行伝10章に書いてある。

「何故、お前は神が与えたものを潔からずとするか」

といって論<sup>さし</sup>しを受けた。我々が作ったものであっても、それは根源的には皆、神の<sup>も</sup>所有です。だから、どんなに移り往くものにおいても、そこにおいて、神の恩恵、栄光を見ていく人は、移り往かざるものに、本当に聖化していく人です。万物を本当に聖化していく人です。こ



ういう人は小さな虫を見ても、その虫のために祈ることができる。シュヴァイツァーなんてのは、かなりその角度の<sup>たましい</sup>靈魂でもあるようです。

だから、世と世の過ぎ行くものに囚われている者はダメだ。しかしながら、一切の過ぎ行くもの、森羅万象、一切のものを、それに囚われず、それを本当に神の側から見えていく、支配していく、つかまえていく、生命づけていく人は、すべての者を祝福していくことができる。こうなつて来たらば、もう人生は本当に勝利です。本当の明るさです。

私はとにかく、この信仰生活に、この信仰に入ったら、昔は秋が来ると、秋のもののあわれ、秋の寂しき、日本人がみる、ちよつとメランコリーなセンチメンタルな寂しさというものを秋において感じて、何かあまりいい気持がしなかったことを憶えていますけれども。その秋の寂しき、そのわびだか、さびだか知らんが、そういったようなものの中に、また私は、新しい姿と響きを感じることができるようになった。春夏秋冬、善からざるはなし。そういうわけで、一切のものが本当に明るく見ていくところの靈魂になる。人間だから、いろいろ感情の波が去来したつて、それにいつも内側から逆に光を与えていく。逆に熱を与えていく。逆に生命を与えていく。どうか、そうなつてください。

## ●非キリスト

<sup>18</sup>子供よ、今は末の時なり、

今や世は病氣である、末法の世である。

汝らが非キリスト来<sup>きた</sup>らんと聞きしごとく、今や非キリスト多く起これり、

もうこの当時、相当そういつたのがいたらしいですね、偽預言者というやつが。「アンティクリストス」というやつです。キリストのような、ちよつと靈的なものの言い方をしながら実は本当のキリストの靈でないようなのが、これが「非キリスト」という。靈的であつて、キリストから外れている者は一番困る。そんなのが偽預言者になったりする。

「非キリスト来<sup>きた</sup>らんと聞きしごとく、今や非キリスト多く起これり」

と。これはダニエル書7章に出てくるところの、怪し憎むべきものというやつがまたこれです。ダニエル書7章25節や、8章の25節に出てくる。

之によりて我等その末の時なるを知る。<sup>19</sup>彼らは我等より出でゆきたれど、  
固<sup>もと</sup>より我等のものに非ざりき。

「我等よりのものに非ざりき」と訳していい。「我らのもの」とは「我らよりのもの」。

我らの属<sup>もと</sup>ならば、我らと共に留りしならん。されどその出でゆきしは、皆われらの属ならぬことの顕れん為なり。

靈的ということは似ているけれども、実は、由つて来たところが違っていた。インチキ宗教、新興宗教なんてのは、なかなか靈的なものがある。それで、御利益<sup>ごりやく</sup>でもって、商売繁盛してみたり、



「めでたし、めでたし」

になってみたり、病気が治ってみたりする。それだから、私たちの間でもって、ちよつと現象的に似たことが起こるというところ、

「どうも少しおかしい」

なんていうようなことで、そのことを警戒する。それは観念の方が無難だよ、なんにも起きて来ないんだから、問題はない。ところが我々の方は起きるんです、時々。それで、

「そいつはインチキじゃないか」

とか、なんとかかんとかと言うわけです。

この間も原田君は、十二指腸潰瘍が癒なおってしまった。浅間の集会の三日間で癒なおってしまった。それは彼が本当の福音の世界にすっかりつかまえられてしまつて、身で受けたから、その欠陥、肉体の痛みが、その靈魂たましいの力でもって逆に癒いやされてしまうということも起きるさ。けれども、これは神様の生命の、栄光の、一つの現れに過ぎないので、御利益を求めてやっているのでもなんでもありません。ただ問題はそんなことが起きたら、いよいよ神様の中に深く入って、御利益を求めない、深い信仰に入っていくことです。

ところが、そういった現象も何も起きない世界では、実は生命は来ていない。本ものがあれば必ず現象する。自然界を見たつて必ずそうです。これは自然物理の法則がその通り、原因結果が必ず現れてくる。霊界の法則がその通り。奇蹟でも何でもない。だから、福音書のキリストなんかはもの凄いい。

但し、それを拒絶している者には現れないですよ、神様の世界を拒絶する者には。人間は物ではないんだから。霊の世界は自由ですから。サタンに組みして拒絶しているようなものには、そいつは現れない。

ところが、この偽キリストは、サタンの霊でもってやっているから。やがて現れてくるところの実によつて、毒麦と本当の麦とが、実がみのつてみたら、片一方は毒麦だったというわけさ。それでないときは、ちよつとわからない。誤解するだけです。

20 汝らは聖なる者より油を注がれたれば、凡ての事を知る。 21 我この書を汝らに贈るは、汝ら真理を知らぬ故にあらず、真理を知り、かつ凡ての虚偽の真理より出でぬことを知るに因る。 22 偽者は

非キリストは、

誰なるか、イエスのキリストなるを否いなむ者にあらずや。御父と御子とを否む者は非キリストなり。 23 凡そ御子を否む者は御父をも有たず、御子を言いあらわす者は御父をも有つなり。 24 初より聞きし所を汝らの衷に居らしめよ。初より聞きしところ汝らの衷に居らば、汝らも御子と御父とに居らん。

今日は「油そそがれたる者」という題です。油そそがれたる者は、ヘブライ語で「マーシアツハ」、ギリシヤ語で「メーシヤ」「クリストス」。イエス・キリスト。「クリストス」というの



は言うまでもなく「膏注がれたる者」。旧約の王たち、祭司たち、預言者たちはその職に任ぜられるときに油を注がれた。まあ、儀式ではないんですが、一つの儀式といってもいいやり方があったわけです。サムエル書に出ているサムエルがそうです。サウルに油が注がれた。サムエル前書10章。

「サムエルすなわち膏の瓶をとりてサウルの頭に沃ぎ口接して曰けるはエホバ汝をたてて其産業の長となしたもうにあらずや」(サムエル前10・1)

産業というのはイスラエルという神の分を受けとるものです。6節、

「其の時神のみたま汝にのぞみて汝かれらとともに預言し変りて新しき人とならん」<sup>7</sup>是らの徴汝の身におこらば手のあたるにまかせて事を為すべし神汝とともにいませばなり」(サムエル前10・6〜7)

神なんじと偕に在すから、神と共在、さっきの内在、内住。衷に留まり、また居る。だから、神様の聖意がちょうど、必然的にそこに自由に現れてくるから、

「手のなすにまかせよ、大丈夫、路から外れない」

というんです。これは「新人」となったから。この新人はまた、「別人」と訳してもいい。

「サウル背をかえしてサムエルを離れし時神之に新しき心をあたえたもう  
しかして此しるし皆其日におこれり」<sup>10</sup>ふたり彼処にゆきてギベアにいたれる  
ときみよ一群の預言者これにあうしかして神の霊サウルにのぞみてサウル  
かれらの中にありて預言せり」(サムエル前10・9〜10)

まだ、サウルの時代の霊は、現象としてはそう高次ではない。ともかく、サウロは神に選ばれた御霊の人で、エホバの霊が彼にかかつてきた。けれども、どこか途中からエホバの霊が逆にサタンの霊に変わった。霊が切り換えてしまった。それだから、ダビデを迫害したり、とんでもない変なことになってしまった。

霊が神の霊であつても、いいですか、その入ってくるものは神様の霊であつても、この神の霊を私したらダメですよ。本当は神の霊は私できないんです。できないけれども、神の霊を本当に神の霊としているならば、それは私できないけれども、神の霊をその現象の面に、またこちらでも何か霊力というような具合に恵みを私する。霊力も一つの恵みだからね。

私たちは、知識を私したらその学者はダメです。事業を私したらその事業家はダメです。みんな、あなた方が持つていろいろの才能を私したらば、それは本当の祝福を受けない。どこまでもこれは神の属として自覚する。その時にそれは無限に素晴らしいものに展開していく。即ち、恵みはどこまでも神の恵みとして自覚するのであつて、これを私したらダメです。私すると、その私した一番すごいものはサタンです。これは神様のエルツエンゲル「天使長」、エンゲル「天使」のうちの指導的な天使だったから。こいつが神の如くなるうとして、自分というものを立てたから、これはサタンとなつて地獄に落とされた。恵みが素晴らしいだけ、霊的な罪というのは一番悪い罪になる。



## ●聖霊は祈りの世界でくる

## 「聖なる者より油を注がれたる者」

という。聖なる者キリストから油を注がれた。即ち、クリスチャンというのは一体何ですか。キリスト者とは、「油注がれたる者」ということです。私たちは「クリスチャンだ、クリスチャンだ」というけれども。キリスト者なんていうと、

「キリストを信じている者」

くらいに普通、思っていますよ。そんな薄っぺらなことではダメです。キリストというのは即ち、油を注がれたる者。キリストは完全に油を注がれた者です。彼は御霊において充滿している、プレローマしている者です。私たちクリスチャンというのは、その油注がれたる者キリストと同質のものです。

何となれば、キリストによつてキリストの恩恵を、その十字架と復活の恩恵を戴いたから、聖霊の降臨を受けた。だから、油注がれた者、キリスト者というのは、油注がれたる者という自覚を、皆さん、もうひとつ新しくする必要がある。我々はクリスチャンであるというのは油注がれたる者。油が注がれていないようなクリスチャンはクリスチャンでない。だから、キリスト者は、聖なる油を注がれたる者、聖油者である。

<sup>25</sup>我らに約し給いし約束は是なり、

「エパンゲリア」「約束」はこれなり、

即ち永遠の生命なり。<sup>26</sup>汝らを惑す者どもに就きて我これらの事を書き贈る。

<sup>27</sup>なんじらの衷には、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教うる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教え、

面白いことが書いてあるね。

かつ真にして虚偽なし、汝等はその教えしごとく主に居るなり。

「油はすべての事を教える」とは、いうまでもなく聖霊のことです。聖なる霊です、ヨハネが「油」と言っているのは。ヨハネ伝には「水」が出てくる。活ける水、活水、これは聖霊のことであると書いてある。水と油とはあい容れないなんていうけれども、そんなことはない。ヨハネ伝に書いてある水と油とは同じことです。

「さあ、困ったな、聖霊とは一体何だろうか？」

と、みんな掴みたくて仕様がないですね、「聖霊とは何だろう」と。霊魂の世界は、対象化するわけにいかない。ここに花があるように、聖霊を見るわけにいかない。

聖霊はどこで見えるんですか、皆さん、聖霊は。困ったですね。「油注がれた」とは、一体どこで油注がれたというのですか。困るです、未だ油注がれたことがないようですね。この確証は先ず福音書にある。使徒行伝にある。福音書、使徒行伝というものは、油注がれたる者キリスト、油注がれて動き出した使徒たち、この実在を先ずよく見ることです。研究したって、それに聞き、その行為の中に身を投ずるようになって読むことです。それをや



ろうとしていると、何か、ある事を必要とすることに迫られてくる。

それはどういうことかという、彼らのあの言や行為の由つて発するところの場はどこにあったか。それは祈りの世界にあった。キリストがものを言い、キリストが事を為す、その前には必ずキリストは深く祈っておられた。使徒たちもまた同じこと。そして勿論、祈りの心地でそれをやっているわけです。でありますから、私たちは福音書や使徒行伝、いや実に全聖書は、これを読むのに、祈りをもつて読まなかつたならば、読めないんです。即ち、「油注がれる」ということは、この祈りの面において注がれてくる。聖霊は祈りの世界でくるので、この祈りを経て、伴わないでは、聖霊の油の注ぎということは起きてこない。それで、深く祈りなさいという。

### 「汝ら常に祈れ」

とパウロも言っている。ただ教会で日曜に祈る時が祈りではない。それはほんの祈りの一つに過ぎない。私たちの、皆さんの毎日のどういう場においても、電車の中で吊革にぶら下がっている時も、眼をつむれば祈りの世界に入る。私は混んだ電車の中なんかでは、本も読めないし、眼をつぶっているのが一番いい。眼をつぶっていると、もう忘れてしまつて、祈りの世界に入つて、本当に楽です。そして、有難いですね。どこでも眼をつぶれば即ち密室だから。眼はこれ窓だから、窓を閉じてしまう。そうすると、

「なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん」(マタイ6:6)

「汝ら、祈るとき密室で祈れ。隠れたるに見給う神は聴き給う」

という。一番深い祈りは沈黙の祈りです。しかしながら、沈黙の世界で、雄叫びを挙げていなければダメです。沈黙の雄叫びというのはそのわけです。体裁の祈りはいくらやつていてもダメですよ、体裁の祈りは。祈りとは身を投ずることであつて、何かこの事か、事をお願ひすることではない。

お願いしていいですよ、皆さん、お願いすることがあつたら大いにお願ひしてください、いろいろ具体的なことで。もつと歌がうたえるようになりたい。もつと絵が画けるようになりたい。もつと本が読みたい。もつと事業が展開したい。もつと字がうまく書きたい。いろいろある。もつと健康になりたい。この中には本当に眼が開けたい人も幾人かいらっしゃいます。皆、のつぴきならない、皆さん一人ひとりの具体的な祈りです。結構です。私もあります。そういう、祈り、それは正直に祈つていい。

けれども、その祈りの対象を私したらダメですよ。その願ひ自身が潔められなくては。そういうこちらの悲願があります。その悲願を本当に神のもの、神の本願、靈願に即するような角度に置いていくことです。それを願ひながらそこにおいて、

「それを通して自分は本当に貴神の栄光を現わしたい。あなたの属として、いよいよその関門をつき抜けられて、ありがとございます」



と。それを祈ってください。

そうしたら、その具体的なことは、あるいは聴かれないことがあるかも知れません。けれども、聴かれなくても、そっちへこれがもう通じてしまう。本願とちらとは、その祈りを祈りながら、その祈りの世界をつき抜けてしまう。つき抜けて絶するんです。これは生涯かけても、あるいは聴かれないかも知れない。あるいは成就しないかも知れない。けれども、それは必ず神の属<sup>もの</sup>として祈っているときには、この地上における達成の世界を更につき抜けて、天界において必ずこれは成るといふことを、今、現において受けとって、これを本当に祈っていくことができる。即ち、祈りながら

「既に聴かれている」

というところをつき抜けながら往くことができる。まだ成就しないものを既にここに受けとって、そうしてその成就を神の属<sup>もの</sup>として祈っていく祈り方が必ず勝利の路であります。

どこで倒れても、どんなにそれが失敗しても、どんなに未完成でも決して悔めることはない。神様は必ず、その祝福されたもの、神のものとして祈られたるものは、

「貴神<sup>あなた</sup>の栄光による貴神のものです」

といって祈っていく時に、これは必ずもう祈りの中に既に勝利している。そうしたら、必ず力がきます。神様は必要なものを必ずそこに与えながら進んでいく。これは皆さん、やって見なければダメですよ、本当にやってみなければ。「そうですか」ではダメです、本当に自分でそこに投じてやっていかななくては。力は来るです。

そういうような祈り方の世界には、もう既に、油は来ているんです、聖霊が。神のものとして、自己をすっかり外<sup>はず</sup>していくところの世界にこそ、聖霊がくる。その外<sup>ほか</sup>のところには聖霊がこない。その祈りの蔭には、十字架が立っている。キリストの十字架が立っている。その祈りの蔭にこそ、キリストの十字架が立つ。いや、その祈りは十字架の下で祈られている。いや実に、その十字架の中で祈られている。

即ち、自分というものは、自分の願いが自分の願いでなくされて、貴神のものとして祈られるときには、私自身というものは、祈る主体である私がキリストの属<sup>もの</sup>になつていなければ。これはこの具体的なものが、キリストのもの、神のものとして祈られる。それでなかったら、これは苦しくてしょうがない。

それで、祈りの世界に大事なことは、自分がキリストによつてすっかり解放され、私というものから解放されて、私たちの人間的な願いに絶することによつて、絶望することによつて、正に絶願することによつて、望みに絶し、願いに絶するところに、神の本願が、キリストの本願がかかってくる。

即ち、十字架されている自分であるから、もうキリストの復活の生命が来ざるを得ない。キリストは私たちをただ空っぽにしておかない。これを空っぽにして置けば、サタンが入ってくるから。十字架で空っぽにされるところには、必ず聖霊がきますから、ご安心ください。



外のもので空っぽにしたってダメですよ。無理な空っぽにしたら、サタンが来ますよ、力んで空っぽになったって。これは悟りの世界でなくて、恩寵の世界の素晴らしいところです。禅宗の世界では「悟り」でもって一生懸命、じんぎょう修行しなければ、わからないでしょう。ところが、私たちはいわゆる修行は要らない。いわゆる修行は要らない。問題は深くキリストの十字架と聖霊を受け、うけとることなのです。

### ●御霊のキリストを受けとる

「御霊を見せてください」

ですって？ 冗談じゃない。来ているじゃないですか、十字架で！ しかし、十字架を受けて、まだ御霊が来ないならば、それは十字架の受け方が悪い。アタマで受けているから。キリストが贖罪したということを、アタマで理解しているから。ただ心で気休めでやっているから。そうではなくて、全身であります、全存在をもって。

「もうこんなもの〔自分、自己〕はなんにも問題でない」

といつてすっかり抜かされている。福音をこの角度から受けなかったらつまらんですよ。

「神様はものすごい素晴らしいものを与えようとしているのに、お前さんたちは、

何故そんなに水割って受けようとするか。何故そんなに水割って、靈魂の扉をい

い加減な開け方をしているか。つまらんじゃないか」

と。キリストはものすごいんだから、どうか、皆さん、さっき言った第一級のクリスチャン、第一級の油注がれたる者になってください。第一級の油注がれたる者になるときに、祈りは体裁じゃダメです。新しい人が、この集会に新しく来たような方がいらつしやるときには、それは激しい祈りは控えますけれども――何も、激しい祈りそれ自身がどうってことはいけれども――静かな祈りで、その静かな中に本当のものが動いてなければダメです。嵐でも、そよ風でも、無風でも、なんでもいいです、祈りの世界は。自由自在です。どうか皆さん、どんな祈りの表現の仕方をして、それが本ものであるという受け方で、また、表現の仕方ですって頂きたいと思う。聖霊、油というものは何かというと、

「永遠の生命なり」

と書いてある。私たちの永遠の生命はキリストの霊が持っているところの生命の外にない。キリストの霊です。

私もクリスチャン生活をやってきました。この次の聖日は、この幕屋を開いてちょうど満16年。9月22日、私の兄が昇天した日ですが、私の信仰の歩みを少し回顧しながら、お話ししたいと思っています。この次は皆さん、来てくださいよ。またどうか、来ない人たちを誘って来てください。自分だけ来ればいいなんてではダメですよ、引っ張って来なければ。それから夕方は清瀬〔東京療養所東講堂〕で、「最初の殉教者ステパノ」の話をしますから。この次の日曜日は、朝から晩まで、また棄身の戦法であります。



<sup>25</sup>我らに約し給いし約束は是なり、即ち永遠の生命なり。<sup>26</sup>汝らを惑す者どもに就きて我これらの事を書き贈る。<sup>27</sup>なんじらの衷には、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教うる要なし。

聖霊が入ってきたから、これは一切のものを知らしめる。教える。これはパウロもコリント前書1章、2章のところで言ってます。そして、御霊の注ぎのことを深くここで言いまして、さっき言った「誠命を守る」とか、「の中に居る」とか、「に留まる」とか、「宿る」とかいったことが、ここではじめて、今の2章の終りにきてはつきりする。

即ち一体、「キリストの中に居る、留まる」ということは、具体的には何かというと、祈りの世界で本当に「御霊のキリストを受けとる」ということ。御霊のキリストをですよ、聖霊のキリストを受けとる。キリスト御自身は天界に居られる。けれども、御霊のキリストは万人に、百パーセントに臨んできます。そして、御霊のキリストが来たらば、さてその次はどういうことになるかということが3章に書いてある。それは今日は言いません。このヨハネ第一書の第3章というのはクライマックスですから。この2章でもって、御霊のキリストが内住してきた。そうしたらば、2章の始めから言っているところのヨハネの言葉が、最後に来たら、そこから逆に光がパアッとそっちへ照つてきまして、みんなわかってしまう。これはなるほど、ここに答案があつた。

「御霊のキリストが内住する」

ということが、

「私たちが共にする」

ということであつた。

「キリストが神と共に歩いた」

とはどういうことかという、

「神の霊を本当に宿して、父の霊のうちにあつた」

ということだ。これは靈魂をすっかり投げ出した、開放たれたる祈りの世界で、受けとることであつた。祈らざる者はどんなに聖書を研究しても、油注がれたる者、キリスト者とはならない。油注がれたる者とはならない。キリスト者とは——もういつぺん言います——「油注がれたる者」ということである。即ち、

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

と。ロマ書8章9節。油注がれざる者は油注がれざる者なりということです。Aは即ちAなり。なるほど、そういうことになりました。それで即ち、キリスト者はイコール聖油者、イコール聖意体現者、聖意を成就する者である。それは真の実存者であります。

何か、読み忘れてしまったようだけれども、まあそのへんにおきます。



## ● 祈り

かつて、使徒ヨハネを捉えし御霊の神様。このヨハネ書翰第2章に入りまして、誠に誠命いましめは原始はじめよりの誠命、また旧くして、キリストにおいて新しくせられたる誠命。実にイエス・キリストを受け奉るときに、実に彼によつて私たちは聖霊の降り注ぎをいただき、今、まことに十字架によつて、すっかり贖われたる己を受けとり、そこに降り給うところの、燦々たるこの神様、この御霊の光、私たちの中に今、降り注ぎ下さり、感謝いたします。お父様、キリスト者とは御霊注がれたる者、油注がれたる者の意であることを、ハタと受けとり、一人ひとりが本当にこの祈りの場において、直ちに全身を注ぎ出だし、全存在を貴神あなたの前に投げ出し、両手をひろげて、貴神あなたに「父よ！」と叫び、「キリストよ！」と叫び奉るときに、即ち、我もなく世もなくただ主のみ在いますところの神様、御霊が降り給うことを感謝いたします。一人ひとりの中に主イエス・キリストきたり、宿り給うときに、私たちは本当にここに新しき新人となり、サウロの如く、またダビデの如く、いや実に、預言者アモス、ホゼア、かのエレミヤ、イザヤの如く、また、パウロ、ヨハネ、ペテロの如くに、いや実に、第一級のキリスト者になりとうございます。どうかその意味において、その第一級のキリスト者が全く貴神あなたの属もつであることを自覚する者であります。

お父様、このようにして、兄弟姉妹たち、今、勇み立つてその前進を始めて感謝であります。この幕屋を貴神あなたのものとして祝福し、大いに用い給わんことを願ひ奉ります。また、日本全国、到るところの集会、そこにおいて聖霊だけが真に天来から切り込み、そして人々を新しくリバイバルして、この日本に新しく霊的革命が起こらんことを切に願ひ奉ります。お父様、然らずんば、日本は真に世界に光を放つことができません。汝の光を持たざる者は光として認めることができません。本当にキリストの光、日本に照り給ひまして、この日本こそが真の極楽浄土となり、本当に東方より光が発することが出来ます。その一人ひとりの燈台と私たちが成らずんば、あるべからずであります。

お父様、本当に主に即つける自覚が新たに始まり、感謝であります。どうか、一人ひとりのその業を、その為すところを、その角度から祝福し給わんことを願ひ奉ります。私たちの願ひは己に絶し、キリストにおいてこれを受けとらしめ、感謝であります。お父様、本当に毎日毎日がそのような本当の実力を、光を、力を受けての前進また前進であります。兄弟姉妹たちを真に祝福してやってください。如何なる困難もすべて突破して行きます。なんとすれば、キリストがこの御霊の力となり、智慧となり、光となり、生命となつてくださるからであります。今、心からの感謝と願ひ、御名によつて捧げ奉ります。アーメン。

